

第112回日本皮膚科学会総会 女性医師を考える会企画 皮膚科を楽しもう Enjoy Dermatology!

日本皮膚科学会女性医師を考える会

高山かおる¹ 蓮沼直子² 加藤則人³ 東 裕子⁴
菊地克子⁵ 伊藤明子⁶ 本田ひろみ⁷ 鶴田京子⁸
岡崎愛子⁹ 青山裕美¹⁰ 永井弥生¹¹ 檜垣祐子¹²
常深祐一郎¹² 中島喜美子¹³ 松永佳世子⁸ 塩原哲夫¹⁴

はじめに

現在、日本皮膚科学会の新入会員の7割が女性で、女性の割合は若い世代ほど高くなっている。その一方で、女性入局者のおよそ7割が10年以内に退局してしまい、その多くは非常勤医師になってしまうというアンケート結果がある。日本皮膚科学会はこれらの問題を踏まえ、「皮膚科の女性医師支援活動は単に女性医師の問題ではなく、すべての皮膚科医のために、そして医療界における皮膚科医の立場を向上させ、社会に貢献するために考えるべき問題であることを再確認する」という基本理念のもとに皮膚科女性医師を考える会を設立運営してきた。2009年委員会設立後から問題の抽出、意識改革、支援等をさまざまな形で実施してきたが、日本皮膚科学会皮膚科の女性医師を考える会では、これまでの取組を振り返り、平成25年度第112回日本皮膚科学会総会において、今必要なことは何かを提言した。本稿ではその内容をプログラムに沿って報告する。

1. Opening remarks 時短から常勤へのハードル

東京医科歯科大学 高山かおる

女性医師を考える会では、現状把握のために、アンケート調査を数回にわたり対象者を変えおこなってきた¹⁾²⁾。その結果、女性医師の退局の理由は、専門医制度導入による医局離れ、夫の転勤、育児、病棟勤務・当直などの業務内容、退職後のモチベーションの低下などであった。委員会ではこれらの問題に関し、ロールモデルの提示などを目的としたメンター&メンティー会を3年間にわたり行い、成果を上げている³⁾。しかし、それでもなお医局離れが防げていない、指導者の立場の女性医師を十分には養成できていないという問題が残る²⁾⁴⁾。一方で、「退局することで皮膚科医としての能力に不安を感じている」、「実はサブスペシャリティや研究もしたいと考えている」専門医が多いことも分かる。思惑や希望と、早期に退局する選択肢をとる、一見矛盾する結果を踏まえ、この先必要なことは、「私たちは皮膚科医として専門性を追求するという社会的役割をもっている」という「プライド」をしっかり持つことなのではないだろうか。それは「ライフワークバランスを保つ」という保身的なものを離れ、「ライフもワークも自分の荷物である」という認識を持つことだが、ひとりが背負える荷物の量は、ある程度は決まっているので、ライフが重い時にはワークを軽くし乗り切っていく、また軽くした分ワークの質をあげることで対応できるのではないかと意識を変化させたらどうだろう。困難な状況を乗り切ってプライドを持ち続けるためには、能力の不安を取り除き皮膚科学を全うする充実感、楽しさを味わい、興味と向上心を保つことが解決策になると提言する目的で「皮膚科を楽しもう Enjoy Dermatology!」を企画した。

- 1) 東京医科歯科大学
- 2) 秋田大学
- 3) 京都府立医科大学
- 4) 鹿児島大学
- 5) 東北大学
- 6) 新潟大学
- 7) 東京慈恵会医科大学
- 8) 藤田保健衛生大学
- 9) 奈良県立医科大学
- 10) 岡山大学
- 11) 群馬大学
- 12) 東京女子医科大学
- 13) 高知大学
- 14) 杏林大学

2. 若い皮膚科医への指導医の思い

京都府立医科大学 加藤則人

指導医が普段どのような思いで自分たちの指導に当たっているのかを知ることは、自らの目標に向かって研修の日々を送る若い皮膚科医にとって道標の一つになると考え、全国の主研修施設の責任指導医へのアンケート調査を行った。スペースの関係ですべての回答を紹介することはできないが、特に若い皮膚科医に紹介したいものを、女性医師を考える会の委員の投票で選び、紹介した。

Q:「指導医として若い医師を育てる上での信念などがあれば、ご紹介ください」の質問に対して、「患者本位の医療ができる医師、疾患の本質とともに背景などにも配慮できる医師、生涯学び続ける医師、自らの診療に誇りを持てる皮膚科医、同僚やコメディカルを大切にする医師、一生を通じて社会貢献できる医師」など目指してもらいたい医師像について多くの熱い思いがあった。

Q:「指導医として、若い医師のモチベーションをあげるために工夫していることがあれば、ご紹介ください」の質問に対して、「先入観なく一人ひとりの個性を尊重している」、「無限の可能性を持つ若い医師の可能性を伸ばすよう心がけている」、「自分の子供以上に面倒をみてきたつもりである」などの回答があった。

いつも温かい思いで（ときには厳しいが）若い皮膚科医たちの成長を見守っている人がいることが伝われば幸いである。

3. 専門性の高いスキルを習得して実践しよう

A. パッチテストをどんどん活用しよう

新潟大学 伊藤明子

接触皮膚炎診療の醍醐味は、接触アレルゲンを見つけて除くことにより難治性、再発性の皮膚炎を完治できることにある。例えば顔面の皮膚炎は生命にかかわらないため軽視されがちであるが、患者にとっては「学校や職場に行けない」、「人の顔を見て話すことができない」など「心」に大きな傷をつくり、社会生活にも影響を及ぼす。なにかだめでなにを使用してよいのかを患者に具体的に示すことは皮膚炎の治療のみならず、患者の「心」を癒すことにも役に立つ。接触皮膚炎を見逃して漫然とステロイド外用剤やタクロリムス軟膏を使用し続けることで、酒さ様皮膚炎や毛包虫性

瘡瘍、真菌症などを続発させる場合もある。難治性下腿潰瘍の治療に際し、外用剤の接触皮膚炎の可能性を考えているだろうか。化粧品、医薬品、生活用品の接触皮膚炎における原因究明は、個々の患者の治療に役立つだけではなく、時に製品の安全性を高めることにも繋がる。パッチテストは有用な検査であるが手技の煩雑さ等、様々な理由で皮膚科医に倦厭されがちである。具体的な方法を知りたいという声にこたえて、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会ではパッチテスト・プリックテストハンズオンセミナーを行っている。過去4回のセミナーのタスクフォースは、偶然にも自分を含め全て女性医師であった。セミナーの準備や講義は、体力、気力を要するが、受講された先生の熱意や笑顔と、タスクフォースとして参加している先輩、同世代の女性医師の各々が介護や育児をしながら皮膚科医としての日常診療や教育に携わっている姿に勇気づけられている。専門分野は無理に探さなくても、日々の診療をこつこつとこなし、与えられたチャンスを「私には無理」と決めつけず、ちょっとがんばってみることによって自ずと見つかるものである。気軽な気持ちで「パッチテストをしてみようかな」と思っていただけならという気持ちを込めてお話しした。

B. エキスパートになると見えてくるもの

東京女子医科大学 石黒直子

1992年から膠原病外来のチーフ、2002年から臨床の疑問点から血管炎をまとめ、2004年から蕁麻疹外来のチーフを兼務した。今回は1つのことを長く続けてきて、見えてきた皮膚疾患やもの（こと）の一部を紹介したい。

その前に私自身も卒後何回か出会った落とし穴がある。最も大きなものは卒後6~8年目に訪れた。なんでもできるつもりになったこの時期に、立て続けに“怖い経験”をし、“知らない怖さ”を思い知った。丁度この時期が現在の専門医を取得する世代に一致する。この先に見えてくるものは何か？

①膠原病外来から見えてきたこととは

蝶形紅斑には鼻根部に紅斑がないものや鼻根部近傍のみに紅斑を認めるものもあり、そのバリエーションを知ることで、非典型的な蝶形紅斑も“見える”ようになる。また、蝶形紅斑を見たら、SLEになることを肝に銘じよう！皮膚筋炎では皮膚症状が先行することが多い。軽快のない上眼瞼の浮腫性紅斑（ヘリオトロープ疹）から皮膚筋炎が“見えて”くる。早期診断がで

きるのは私たち皮膚科医である！レイノー症状と爪郭部出血点があり、皮膚筋炎の症状がなければ、皮膚硬化がなくても汎発性強皮症が“見えて”くる。強皮症特異抗体を検討することで、limited型かdiffuse型か、患者の将来も“見える”ようになる。

血管炎をしていて見えてきたこととは片側に偏って認めるリベドは温熱器の使用で出現するErythema ab igne（いわゆるひだこ）であり、血管炎ではないことが“見えて”くる。などなど、1つ1つを確実に身につけることで、適切な返信を内科に送ることができ、強い信頼関係を築くことができるようになる。

② 尋麻疹外来から見えてきたこととは

適切な説明・治療法につくる！

以上に共通して見えてくるものは自信である。ある分野をきわめることで、皮膚科一般診療にも自信を持つようになる。

最後に指導医講習会で繰り返し教えられる以下の言葉を皆さんに伝えたい。

人生の目的

1. 自分に潜在する能力をできるだけ引き出す。
2. 他の人と好ましい人間関係をつくることができる。
3. 他の人の人生に意味のある貢献をする。
4. こんなふうに皮膚科を楽しんでいます。

4. シャーロックホームズのごとく推理と検証を楽しもう！

島根大学 千貫祐子

私は全くエリートではない。では、なぜ私が解析を始めるようになったのか？ターニングポイントの1つ目は勘違いである。32歳の時に参加した日本皮膚科学会専門医講習会で、若くて綺麗な先生が講演している姿を見て、なぜか、自分もなにか発見するかもと、本当にお気楽に、恐れ多くもそうってしまった。講習会から戻った私は、早速患者さん達の過去のカルテを紐解き始め、まずは統計から始めた。ターニングポイントの2つ目は尊敬できる上司に出会ったことである。目の前の患者さんに起こっている矛盾や疑問をそのまま見過ごすことなく、解析をして世の中に役立つ検査法を開発する姿を見て、自分もそうありたいと思った。上司達が始めた小麦アレルギーの解析の歴史があったからこそ、私達の教室が茶のしずく石鹸による小麦アレルギーに気付くことができた。ターニングポイントの3つ目は、とにかく臨床を頑張ることである。大学病院に勤務する私は、週に1度、僻地の病院

に診察に出かける。2007年当時の外勤先では、1日に100人以上の患者さんの診察をしていた。その中の一人が牛肉アレルギー患者さんであり、牛肉摂取を避けていたにも関わらず、子持ちカレーを摂取してアナフィラキシーを発症した。まさに、目の前に起こった疑問である。こうして、私と牛肉アレルギーのお付き合いが始まり、現在に至るまで解析を続けている。臨床は疑問だらけである。皮膚科ほど病気の種類が多い科はなく、少し疑問を持って解析すれば、あっという間(!?)にその病気のスペシャリストの仲間入りだ。皆で皮膚科を楽しみましょう♪

5. Closing remarks : 皮膚科を楽しみ続けよう！

皮膚科女性医師を考える会からの提案

—短い時間でできるスキルアップ—

鹿児島大学 東 裕子

秋田大学 蓮沼直子

スキルアップし自信をつけること、得意分野をつくり技術を習得していくことは、周りの医師や患者から信頼され充実した仕事をするにつながる。特に、子育て期の一番の問題はやはり自信がないということにある。同級生に後れを取っている、周りに迷惑をかけていると気後れすることで、ますます自信をなくしてしまう。そういう時期こそ、スキルアップが大切だと考える。時短勤務、当直免除などサポートされている医師は仕事（磨いたスキル）で、将来その恩を返していけばいい。日常のちょっとした時間でできるスキルアップ法、診療、カンファレンスを生かすコツなどを提案した。

6. 企画終了後参加者アンケート調査

鹿児島大学 東 裕子

全体として満足度の高い企画となった。アンケート調査の結果を今後の活動の参照にして、多くの皮膚科女性医師が生き生きと活躍できるような提案を続けた。

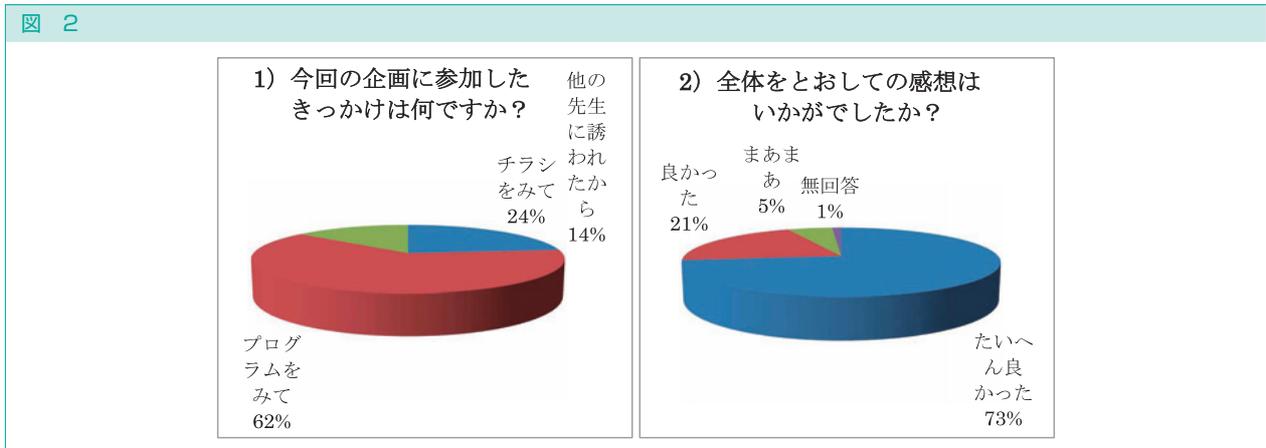
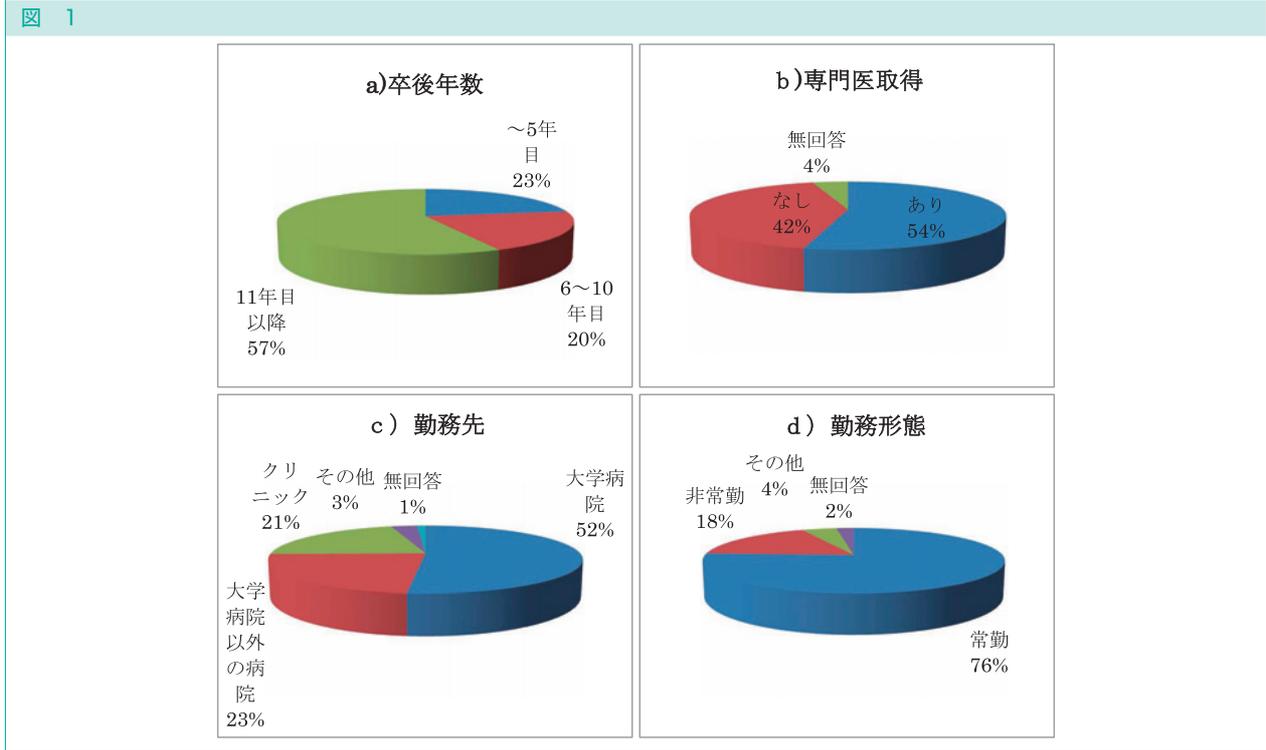
アンケート結果

回答数：93名

回答者属性（図1）

アンケート内容（図2）

- 1) 今回の企画に参加したきっかけは何ですか？
- 2) 全体をとおしての感想はいかがでしたか？
- 3) 今回の企画でよかった点や改善した方がよい点など（自由記載・抜粋）



・子育てをしても第一線で働いている先生の声を直接聞いて、子育て→パート、非常勤というわけではないということが実感できて、がんばろうと思った。

・元気な先生の苦労話を含めながらの臨床、研究報告を聞いて私のほうも元気が出た。

・皮膚科の楽しさを知り、モチベーションがあがった。

・医師として、人として、社会にかかわる意義が伝わった。

・いまのまま育児との両立のためパート生活を続けていくのかなあと漠然と思っていたが、講師の先生方

が元気で楽しいお話をされ感動した。やる気さえあれば何歳からでも皮膚科医として社会貢献していけるかもしれないと勇気をいただいた。

・毎日を漠然と過ごすのではなく、目標を持って皮膚科医としてのスキルを楽しくアップできればと思った。

・専門分野を選ぶきっかけ、そして専門分野を極めることのおもしろさをとても楽しく興味深く聞いて本当に良い企画だと思った。

・女子医学生が皮膚科を選択するうえで「楽そうだから」というイメージを持たないような教育をしてい

く必要がある。

・能力もモチベーションも人一倍高い「スーパーウーマン」でなくても働き続けられる環境を望む。「一人前に働けなければお荷物」という風土に苦しんでいるものがあることをもっと伝えたい。

4) 今後取り上げてほしい企画（自由記載・抜粋）

・女医さんが実際に使っている育児サービス，家事サービスの紹介，各医局の支援システムの紹介，やりくりの工夫

・大学病院だけではなく人数の多くない一般病院の苦労話なども取り上げて欲しい。

・男性医師も専門医取得後にすぐ医局をやめる人が

いると思うが，その人たちの動向，意識調査も行ってほしい。

・研究面でも活躍されている先生に話をききたい。

文献

- 1) 塩原哲夫：JDA letter 第1号：特集2.
- 2) 塩原哲夫：女性医師問題の課題と展望，日皮会誌，2012；122：3593-3595.
- 3) 塩原哲夫ほか：JDA Letter 第3号：特集1.
- 4) 青山裕美ほか：女性医師が増えることは問題なのか？女性医師問題の課題と展望，日皮会誌，2012；122：2851-2857.